

## 『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』

### 三 桐 慈 海

三論宗の吉蔵は、中国に佛教が伝えられてより隋唐に至る、佛教教義の主流となっていた般若思想の体系化をなし遂げた一人として、天台宗の智顛とともに並び称せられている。したがって教理史的な研究がなされるときには、必ず吉蔵の教学に言及されており、その重要な教義についての優れた研究も既に多く発表されている。また吉蔵の著わした三論玄義はその綱要書ともいべき書であるため、それが解題される中で彼の組織した教理は論じられている。それに多数の経や論の注疏が現存しており、そこには南北朝時代にいたる諸師の説が博く引かれていることもあって、中国の佛教を研究する者の等しく被見するところとなっている。しかしそれにもかかわらず三論宗や吉蔵の研究として纏められたものとなると、大正九年に刊行せられた前田慧雲博士の「三論宗綱要」が挙げられる位であろう。

わが国における旧来の佛教研究は、宗学を出発点とし、それ

をより充実させることを目的として行われてきたといえよう。それが明治以後にヨーロッパの科学的客観的な研究方法の導入によって、文献研究を中心とする佛教研究が盛んに行われ、三國伝通的な視点とは異った、インド・中国の佛教の検討がなされるべく志向されるようになった。境野、伊藤、常盤などの諸博士によって著わされた歴史の教理史的な研究の成果は、このような文献学を基盤とするものであり、先の前田博士の研究もその域に属するものである。そしてそれより以後は一層の綿密な文献研究に合せて、より広い視野に立つての文化史的思想史的な観点から、あるいは歴史の観点からの研究も要請されている。そのような研究領域拡大の傾向は、吉蔵の三論教学の研究の上にも言い得ることである。殊に三論が龍樹・提婆の著わしたものであることから、インド佛教における中観派の文献がほぼ解明されてきた今日、その研究成果をふまえての深く精密な示唆が、中国佛教の文献解明の上に提示されることになった。したがって中国佛教としての三論教学の研究では、いわゆる中国佛教の独自性の究明がなされねばならず、そのためにはインドの般若思想との比較検討と、中国在来の諸思想との相互関係の解明とがなされねばならなくなった。三論宗の研究や吉蔵の研究が一つの著述として纏められ得なかったことには、そのような理由も含まれているものと思われる。

それがこの度「吉蔵と三論学派」の副題をもち七百余頁にわたる大作となつて、駒沢大学の平井俊栄氏によって著わされ公開されたことは、まさに画期的なことといえるであろう。はし

がきによれば、本書は「吉蔵を中心とする三論学派の研究」と題する学位請求論文であるとの由、それが「中国般若思想史研究」の書名によって刊行されたのは、先に述べたような意図をもつてのことであろう。本書には、吉蔵と曇影の中論疏の關係や、今は散佚してしまつた涅槃經疏について言及されている。

これは従来他の研究では見逃されていた課題であつて、著者のわが国南都の三論宗の研究、就中、安澄の中観論疏記の詳細な検討によつて導き出されたものである。三論宗は中国でははやくより途絶え、吉蔵の著述も散佚して、現存する書はわが国に伝えられていたものである。これに着眼しての研究方法は、その洞察力の鋭さを示すものであろう。

わたくしが氏の研究に初めて接したのは、日本印度学佛教学会第十四回学術大会における「二諦説より見たる吉蔵の思想形成」であり、その折の氏の発表には、綿密な資料の調査にもとづいて明確に結論が導き出されて、印象深いものがあつた。その後も着実な資料の整理とその読解によつて、次々と研究の成果が発表され、その都度に畏敬の念をもつてそれらの論文に接してきたのであるが、その成果が纏められて刊行される運びになつたことは御同慶のいたりである。そこで今その大略を紹介し、二三の私見を述べてみたいと思ふ。ただ何分にも大著であり、浅学非才のよく尽くし得ないところであつて、管見の過誤を恐れるものである。

## 二

本書の構成は、序論の三「本書の組織と大綱」に懇切に示されており、また詳細な目次によつて一目で全体が把握できるよになつてゐる。それによると全体は、第一篇「吉蔵からみた三論学派の成立史的研究」と、第二篇「吉蔵における三論教学の思想的研究」の二篇よりなる。前篇は「新たな観点からその歴史的な体系化を試みたもの」、後篇は「吉蔵を中心とする中国の三論学派には現実肯定的な面が非常に顕著に見られること、」それが涅槃經の思想からの影響であることが、著者の主張の骨子のものである。確かにこの二項は、三論宗研究における大きな懸案であつた。本書ではそれがどのように究明されているのかを、第一篇より各章順次に紹介しながら、そこにみられる問題点を考えてみたい。

序章「中国三論宗の歴史的 성격―特に中国佛教における宗派の成立をめぐる」で、ここでは中国の佛教において各宗を眺めるとき、日本佛教における宗派の意識をもつてしてはならないと、その誤りを鋭く指摘する。そして隋唐時代までは「宗」の意味が、思想の根本義を示すものであり、それが一經一論の宗義をあらわすようにはなつても、宗派の意味にもちいられた事例は見当らないとして、三論学派と呼称することの正当性を論じてゐる。しかしその場合には著者も既に述べているように、吉蔵が佛教の体系化を成し遂げたという事実に対して、どのような評価をあたえるかに問題はしばらくしてくるであろう。三論

学派の吉蔵、天台宗の智顛と呼ぶとき、両者にどのような相違点を挙げていくのであろうか。そして成実学派という場合とは如何、という問題が出てくることになる。いずれにしても呼称についての説明は、つけないではすまされないことである。

第一章 「三論学派の源流系譜」。羅什より吉蔵にいたる従来の相承説を整理し批判して、そこより種々の問題を提起する。就中、吉蔵がよく用いている「関河旧説」の意味を、関中の羅什やその門弟達と河西道朗であることを立証し、吉蔵の心証からみた三論の伝灯を明らかにしている。この論究は今迄に曖昧にされていた課題だけに、美事という外はない。私見では「関河旧説」と「撰嶺相承」とを直線上に並べる必要はなく、吉蔵は羅什より撰嶺にいたる間に、特定の人脈を考えてはいなかったと理解している。

第二章 「三論伝訳と研究伝播の諸事情」。この章では先ず大小品の般若経と智度論等の四論の翻訳事情が、項を別けて述べられている。鳩摩羅什の翻訳事業については、既に学界に多くの研究がなされており、これがまとめられたものである。次に羅什門下の僧叡・曇影・僧肇について、これも項を分けて論究されている。しかしここでも新たな着眼によって諸師の学説を究明したというわけではないようである。僧叡の思想を論ずることは困難な作業であり、その壁を破るべく努力した論文も既に発表されていることである。今少し思想についての見解が示されているが、それがよほど重要な意味をもっているものであろう。

うか。それに比して曇影の中論疏に言及され、その資料があげられていることは、安澄の中観論疏記に注目された成果であり、学界へ裨益すること多大であろう。僧肇の項では、その三家批判と体用相即の問題が取上げられ、著者の見解が述べられている。以上は後篇の伏線としての意図のもとに記されているのであろうが、いずれも項を分ける必要性は感じられない。続く「三論の江南伝播」は廬山慧遠とその門下、僧叡、僧導と門下が列挙され、高僧伝や佛教史関係の諸論文によって、手際よく整理されている。これによって江南の三論研究や成実論研究の状況が浮彫にされていて理解を容易にさせている。本章中に些細なことではあるが、二三次のようなことに気付いた。鳩摩羅什の訳業を、サークル的訳業と国家的な訳業というように分けることが妥当かどうか（八九頁）。僧叡の毘摩羅詰提経義疏序の句読は、この頁の方が正しい（一二四頁）。羅什門下のサロンの三論研究とはどのような意味であろうか（一四六頁）。像末とは像法之末であろう（一六一頁）。

第三章 「三論教学成立史上の諸問題」。羅什歿後の門弟の動静や、その学派については不明の事が多く、南北朝時代の般若学の動向は未だ十分に究明されているとはいえない。それが本章においては、多くの史料や三論宗の注疏などに依って、その糸口的一端が解かれているといつてよいであろう。先ず般若経や三論を研究講説した人々を挙げ、その学系が推定されて、その中より江南における成実論研究の隆盛にいたる兆候に言及する。次いで智琳と周顛の関係を取上げて、綿密な検討が行われ

ている。周顒の三宗論については、僧朗に受学したことによると吉蔵が述べているところから、その是非について種々に論ぜられてゐる。それをここでは一層明瞭にしているといえよう。

智琳の中論疏については従来詳細な検討はなされていまいとこゝろであった。著者はここでも中観論疏記に引用されている疏文を整理し、吉蔵疏、曇影疏と比較検討することによつて、「この三疏の間には、年代的にも発達のな縦の関係を予想せしめるものがある」と結論する。次に吉蔵が「北土三論師」という呼称で引いているものが、「決して三論宗北地派の学説一般を指すものでない」として、法瑤の中論疏であろうと推定している。これは引用句を吟味した上で、旧来の仮説である曇鸞説、荏法師説、琛法師説の一一に吟味を加えての推論である。次に従来一般に言習わしてきた新三論・古三論の呼称が、必ずしも同じ時代区分を示すものでない点を取上げ、学的根拠を持たない俗説であるが、中国の三論においてこの呼称をもちいるならば、僧朗以後とそれ以前に分つことが妥当であると結論する。本章では三論宗成立の前哨となるべきほとんどの重要な課題を取上げて、それが綿密に微細に入つて論究されていて、言を挟む余地はない。敢て言うならば、南北朝時代の特色ある教学史の全般的な流れの中で、四論宗や智度論師、あるいは羅什系の般若三論学と南地の般若三論学などが、どのような位地づけをされるのかを、著者の該博な知識でもって略述されていたならば、読者にはより一層理解し易くなつたように思われる。また曇鸞の学系について、安樂集の記述によることには疑問がある。

第四章「撰山三論学派の成立—三論の復興」。先ず僧紹の棲霞寺創設と法度、法度と僧朗の関係が論じられ、開基としての法度と三論の学系は別であり、法度を学系より除くことを提唱する。そして僧朗の受学の師について、敏煌の曇慶説を否定し、周顒と僧朗の出会いの可能性を精密に考究して、吉蔵の伝える周顒受学説が、同時に周顒によつて僧朗が受学したという可能性も成立たせることを述べて、興味深い問題を提起する。僧詮については、「山中興皇」「撰嶺興皇」という吉蔵の呼称が僧詮と法朗であること、高僧伝の僧詮の項に混同があることを指摘する。そして僧詮が般若経と三論のみを講説し坐禪三昧を修したことを述べて、詮公四友の傾向に言及して、慧可の門流との関係を述べる。

第五章「興皇相承の系譜—三論の発展と分極」。本章は法朗とその門流、三論宗の涅槃経研究の状況、三論系習禪者の系譜が述べられる。先ず法朗の伝記とその門弟が列挙され、その中より吉蔵、智矩慧哲それぞれの門人が調べられて、そこに三論を講ずる者と習禪に傾く者の二極に分れていった動向をさぐっている。次に僧詮は涅槃経を講ずることをしなかつたが、その門下には研鑽講経したものも多いとして、その名を挙げる。そして法朗には涅槃経疏があつたと推測し、その受学はやはり僧詮によると推定されている。次に習禪者として羅雲、法安、そして明法師とその門弟について論じられる。また明法師と牛頭法融との関りにも言及されている。本章の結語には、著者の三論研究の意図が表われていて、興味深いものがある。

### 三

第二篇よりは吉蔵の思想的研究である。序章と第一章、吉蔵の伝記と著作の研究は涅槃經疏の研究をも含めて、恐らく著者の独壇上であるといつてよいであらう。「撰述の前後関係」「吉蔵著作の古逸書」には資料を十分に掲げて、綿密な論及がなされている。第二章「吉蔵思想の論理的構造」は、吉蔵が諸經論を注釈するに当つて用いる、基本的な論理の範疇を解説したものである。先ず無所得とは「空や無我の実践的表現」であり、「中道実相の体を悟り、因縁仮名の用を解る」ことを意味すると述べ、勝鬘宝窟の「佛法大宗」の語に言及して、これが「般若思想と如来蔵佛性思想との相即を意図したもの」と主張している。そしてその観点から理教、体用、中仮の意味を説明する。また初章義・四種釈義・横論堅論の意義、三種中道義などが詳細に解説されていく。次いで初章中仮義と中仮師批判の問題が論じられ、法朗や吉蔵は初章と中仮を区別したのに対し、これを区別せずに初章中仮を教学の根本に据えたのが中仮師であろうと推論する。けだし妥当な見解であらう。続いて吉蔵の約教二諦説が論じられている。この中で約教二諦の根本構造として初章の文に留意し、その初章の文が曇影の中論序の文に依つていることを、両文の対比によって立証している。これはユニークな見解といえよう。また周顛や広州大亮の説を位置づけするに当つて、「思想的には同一の系譜上に連なる」ものでも、約教二諦説の創唱者とはみないという見解も同感である。

第三章「吉蔵の經典観と引用論拠」では先ず吉蔵の經典観を、いづれの經典も優劣がなく同価値のものとして、ただその特質を論ずるのに一つのパターンをもって行つていと解説する。次いでそれによって二蔵三輪説の意味と教判の關係を明らかにし、当時行われた五時四宗に対する吉蔵の批判の意義が述べられている。続いては吉蔵の著作の上にもみられる引用經論の種類と回数が掲げられ、中でも多く引用されている涅槃經の引用文が分析されて、吉蔵に与えた思想的な影響が論じられている。第四章「三論教義に關する二、三の問題」では、三論教学の重要課題である二諦相即、二智義、佛性義が論究されている。これらの諸問題は詳細に論じられていて、簡略に紹介することは困難であり、そのために誤りを犯すことにもなりかねない。そこで些細なことではあるが気付いた二三を挙げてみたい。「方言」の語を(標準の説ではないという意味)と説明されており、あるいはそのような意味でもあろうが、手段として用いられた論理形式ぐらいの意味では誤りであらうか(四二六頁)。二諦義の文「説有為世諦、説無為真諦」と、中觀論疏等の「以有為世諦、空為真諦」とを、私は全く同義と理解していたのだが、発展的なものとみるべきであらうか(四七一頁)。涅槃經が要略取意されていることと、「他の諸經論よりも一層涅槃經に精進」することは、必ずしも一つではないように思われる。涅槃經は大部であり、一つの内容が説示されるにも長文が多い。吉蔵が重要だと思ふところを、一つの型として記憶していたともいえるのではないであらうか(五三二頁)。教誨の説明が「佛

の説法的手段・方便としての「二諦」の意味でなされている（五六五・五八五頁）。勿論これは前後の文もあることであり、文章の一部を取って云々することではない。また一つの解釈でもあらうと思われる。しかし吉蔵の教誦を説明する場合、少し妥当しないようにも思われる。それは吉蔵にとって教誦は無所得の義を現わしたものであり、教誦において体用相即すると考えるからである。あるいは二智義において著者が指摘されるような「完成された佛の智というよりは、むしろ十地の菩薩の修道を論じ」（六〇一頁）るのに当るものかもしれない。そのように考えてみたいのであるが、いかがなものであろうか。以上いずれも著者の論旨を十分理解してはいないままの疑問であろうが、御教示いただければ幸いである。

第五章「三論教学の思想史的意義」では、中国佛教における不空の概念、一行三昧と空觀思想、無住の概念の形成と展開、南宗禅成立の一視点の諸論文が、密度の濃い論調で述べられている。

（昭和五十一年三月、春秋社、A5版、一〇、〇〇〇円）

## 賛助会員募集

次の要項で賛助会員を募集いたします。

○会費 年間千三百円（二冊分）  
○申込み 京都市北区小山上総町

大谷大学佛教学研究室  
佛教学セミナー編集部

\*郵便振替用紙も御利用下さい。  
（京都 25303 大谷大学佛教学研究室）

既発行の「佛教学セミナー」を御希望の方も右記のところへお申込み下さい。

第一号	絶版	第六号	絶版
第二号	絶版	第七号	絶版
第三号	絶版	第二十号	絶版
第五号	絶版		

第四号、第八号より第二十二号の内、二冊以上お申込みの方は送料を研究室で負担いたします。第六号まで各冊二〇〇円、第七号より第十号まで、各冊二五〇円、第十一号より第十四号まで各冊三〇〇円、第十五号より、第十七号まで各冊三五〇円、第十八号、第十九号四〇〇円、第二十一号より第二十三号まで各冊六〇〇円）